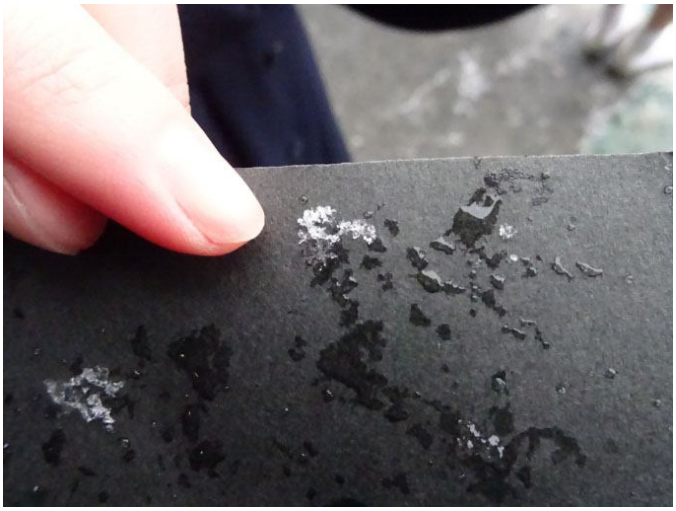
「日々の理科」（第 1298 号） 2018（H30),-1,25

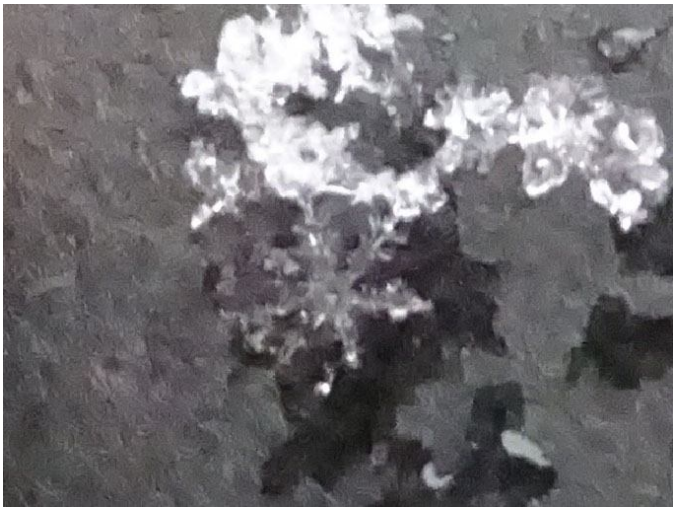
「東京の雪（４）」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

東京の学校の子どもたちとはいえ、雪が降っているところを見たことがない、という子どもはいない。しかし、降ってくる雪粒の正体を実際に観察して確かめたことのある子どもはいない。観察可能なのは降った（着地した）一瞬だけで、その後は融けたり、形状が崩れて、結晶の形が消えてしまうからだ。しかし時々、びっくりするほど美しい結晶が降ってくる。



「先生、見て！あ、撮って！これ、これ、きれいな雪印！！」そう言って見せに来る時は、すでに結晶は融け始めている。



それでも、急いでカメラを接写にして撮影したのが、この写真。美しい「雪印」の結晶が、まさしく融けて水に戻ろうとしている一瞬だ。観察可能なのはせいぜい 10 秒～20 秒。小さな美しい結晶の、一瞬の芸術なのである。

その後も子どもたちは、制服の袖や手袋、それにマフラーについた結晶を、急ぎ、カメラのところに持ってきた。時間が遅くなるほど、雪の結晶らしい形状のものが増えてきた。

写真は「樹枝六花」の一部が欠けたものだろう。さすがに、この気温では完全な結晶は少ない。

これはなかなかすばらしい。別の結晶隠れてしまっているが、ほぼ完全な６本腕を持っている。左側の写真の結晶も、最初はこんなふうに見えたのだろう。